

(別紙様式3)

令和4年度あいちラーニング推進事業研究報告書【重点校】

学校番号 125

学校名 愛知県立 吉良 高等学校

校長氏名 戸 柏 明 子

研究責任者職・氏名	教諭・宮川 孟	
研究テーマ	「主体的・対話的で深い学び」を推進するための取組の研究	
本年度の研究目標	(1) 各教科において、従来の授業を「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れたものに改善し、それを教科間で共有する。また、現時点ではあまり活用されていない生徒用タブレットの効果的な使用方法を、各教科での研究をとおして確立させ、それを教科間で共有する。 (2) 継続的・体系的な取組ができていなかった「総合的な探究の時間（以下「探究」）」の、3年間を見通した指導計画及び教材を完成させる。	
研究の実施内容		
実施月日	内 容	備 考 (対象生徒等)
7月5日	第1回推進委員会 ・事業の目的、推進体制等についての確認 ・本校の研究の方針の決定 ・研究の年間計画の決定 ・「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」に関する基本事項の確認	
9月13日	教科主任会における研修 ・目指す生徒像の設定のしかたについて ・研究仮説の設定のしかたについて ・研究の手立てについて ・ICTの活用について	
9月28日	第1回西三東南地区連絡協議会 ・主管校と重点校の本年度の研究計画及び現状の共有	
9月下旬	各教科で授業改善に向けた研究仮説を設定 ・目指す生徒像の設定 ・研究仮説の設定 ・研究の手立てに関する協議	
10月13日	学年主任会で「探究」の指導計画の検討 ・「探究」の3か年計画について ・次年度以降の3年生の「探究」の単元について	

10月18日	第2回推進委員会 ・各教科の「協働的な学び」及び「生徒用タブレットの使用」に関する研究仮説の共有 ・研究授業の目的等の確認 （研究仮説の実践と検証・評価の観点と評価基準の設定） ・次年度以降の「探究」の指導計画の提案	
11月10日 ～16日	公開授業週間 ・各教科における研究授業の実施 ・各教科会における研究協議 （研究仮説の検証及び評価の観点・基準に関する反省）	
11月11日	あいちラーニング推進事業公開授業の実施 ・主管校助言者による研究授業参観（家庭科） ・研究協議（本校の取組について、研究授業について）	
12月23日	第3回推進委員会 ・各教科の研究仮説の検証報告 ・各教科の評価に関する反省の報告 ・本年度の1・2年生の「探究」の反省の共有 ・次年度の「探究」の実施に向けての修正案・課題の共有 （各単元及び全体計画について）	
3月8日	校内研究報告 ・各教科の授業改善に向けての実践の報告 ・本年度の「探究」の実践の報告と、次年度の計画の共有	
3月下旬	研究報告書のホームページ公開	
研究成果の評価及び普及・還元に関する実績		
<p>1 「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業改善 「協働的な学び」の実践と生徒用タブレットの効果的な活用に向けて、各教科で研究仮説を設定し、それに基づいた研究授業と仮説の検証を行った。また、研究授業では、「指導と評価の一体化」が実現できるような評価の観点及び評価基準を設定するよう心掛けた。</p> <p>(1) 「協働的な学び」の実践に関する仮説と検証</p> <p>ア 国語</p> <p>【仮説】 古文の読解において、グループ活動を取り入れ自分の考えを教員・他者に伝え、評価してもらうことで、受動的であった学習姿勢が能動的になり、主体的に課題を解決できるようになるであろう。</p> <p>【検証】 ○グループの中でそれぞれの生徒が自分の考えや意見を出し合い、能動的に活動していた。また、全体の前で発言することが苦手な生徒も積極的に関わっていた。</p> <p>△今回は学力上位の学級で研究授業を行ったのでうまくいったが、それ以外の学級で行う場合は、より多くの支援が必要となると考えられる。</p> <p>イ 地歴・公民</p> <p>【仮説】 史料の読み取りにおいて、話し合いやグループ活動を設定することで、他者と相談・確認しながら作業を進めることができ、史料の内容やその時代背景をより深く理解することが出来るであろう。</p>		

- 【検証】 ○史料の読み取りをグループで行い、他者と確認しながら作業を進めたことで、生徒が知識を共有し、理解を深めることができた。
△生徒の理解度に応じた課題の設定が難しい。

ウ 数学

【仮説】 置換積分の授業において、ペアごとに解法を指定し、それぞれの解法をグループやクラス全体でプレゼンテーションで共有すれば、1つの問題に対して最適な方針を立てられるようになるであろう。

【検証】 ○全員で1つの問題を扱ったので、生徒がそれぞれの解答を他者と共有し、より考えを深めることができた。ペアを作ることで、数学が苦手な生徒も相談しながら演習を進めることができた。

△解法を他者と共有せずに黙々と計算を進めるに終わった生徒もいたので、生徒間で解法を共有する時間を明確にして、より活発に議論がなされる工夫ができればよかった。また、解法によっては難易度が格段に上がるものもあるので、生徒の数学力に合わせて生徒への解法の割り当てには配慮をする必要があった。

エ 理科

【仮説】 「生物基礎」の授業において、教具を活用し、学習内容を互いに説明する場を設定すれば、自己の考えを順序立てて説明し、コミュニケーション力を高めることができるであろう。

【検証】 ○生徒用タブレットを活用することで、生徒間の情報共有をスムーズに行うことができた。

△他者に自己の考えを説明する際に、プリントを見せるだけになってしまっている生徒がいた。

オ 保健・体育

【仮説】 「保健」の授業において、ペアで感染症予防に関するポスターを作成すれば、必要な予防対策に関する理解を深め、日常生活で生かすことができるであろう。

【検証】 ○ポスターの作成を通して、日常生活で生かすための知識を身に付けることができた。また、ペアでポスターを作成する過程で、身近な話題や経験を共有し、知識を深めることができた。

△見た人にメッセージが伝わりやすいポスターを作成させるための指示・助言が必要だった。

カ 外国語

【仮説】 要約作成において、ペアを何度も変えて要約を発表する活動を通して他者の多様な表現に触れさせれば、自分と他者の表現の違いから学び、改善を重ねよりよい要約を完成させることができるであろう。

【検証】 ○ペアを何度も変えて要約を発表することによって、生徒は多様な表現に触れることができていた。また、そこで気づいた点を自らの要約に反映させることができていた。

△次の発表までの時間が足りず、要約を「改善する」ところまでいけない生徒もいた。

キ 家庭

【仮説】 「生活と福祉」の単元「高齢者支援制度」において、自分で調べたことをグループでまとめる場を設定したり、タブレットを活用したりすれば、自ら考える学びの実現ができるであろう。

- 【検証】 ○生徒自身が調べ、プレゼンテーションを制作したため、生徒は主体的に取り組むことができ、内容を深めることができた。
△発表後にも協働的な活動を取り入れると、よりよい学びができたと考えられる。また、高齢者支援制度を身近な課題として意識させるための工夫が必要だった。

(2) 生徒用タブレットの効果的な活用に関する仮説と検証

ア 国語

【仮説】 文法学習において、ロイロ・ノートを用いて話し合いやグループ活動を行うことで、本来自分の力だけでは理解できないような文法の仕組みを理解できると同時に、仲間と協力して学ぶ姿勢が身に付くであろう。

【検証】 ○その場で生徒の解答を共有し、添削指導が行えるので生徒の授業への意欲も高かった。また、普段の授業以上に完成度の高い答えを出すことができていた。

△準備に時間がかかるため、ロイロ・ノートを毎時間使用することは難しい。使用方法や使用する場面を精選していく必要がある。

イ 地歴・公民

【仮説】 意見を発表する場面において、タブレットを使用して自分の意見を送信することで、声に出すより意見の表明がしやすくなるであろう。また、意見を共有する中で他者からの評価を得られるようにすれば、互いに影響を及ぼし合いながら課題解決をすることができるであろう。

【検証】 ○タブレットを使うことで、生徒の意見をクラス全体で共有することができた。生徒たちは、口頭で発言するよりも意見を表明しやすそうだった。
△タブレットを操作できる生徒とできない生徒との差がある。どの場面でタブレットやロイロ・ノートを使用するか検討する必要がある。

ウ 数学

【仮説】 問題を解く時間において、ロイロ・ノートやグラフ表示ソフトですべての生徒がそれぞれの解法を共有できるようにすれば、視覚的に問題を捉えたり、問題の背景に目を向けたりすることが出来るようになるであろう。

【検証】 ○ロイロ・ノート上で教員と複数の生徒で同時に計算過程や解答の流れを共有でき、教員の必要な助言の手助けや、生徒が困ったときに他者の解答を参考にするなど有効に使えた。

△ロイロ・ノートを使用しなくても解法の共有ができたという意見もあった。

エ 理科

【仮説】 「生物基礎」の授業において、タブレットを活用して学習内容を発表する場を設定し、他者からの評価を得られれば、互いに影響を及ぼし合いながら自らの学習を調整し、より粘り強く深い学習に取り組むことができるであろう。

【検証】 ○ジグソー法を行う際に Microsoft Teams を使用することで、情報の共有がスムーズにできた。

△タブレットの使用法に慣れていないために、学習活動に集中できない生徒もいた。

オ 保健・体育

【仮説】 「保健」の授業において、ペアでのポスター制作のためにタブレットを活用して有効な感染予防に関する情報の収集を行えば、生徒が感染予防の意識を高め、行動を改善することができるであろう。

【検証】 ○タブレットを活用しながらペアで話し合うことで、得た情報を共有することができていた。

△ペア内の役割分担がうまくできず、必要以上に情報収集に時間がかかるペアがあった。タブレットで調べることでばかりに気をとられ、ポスターを作成するのに十分な時間を確保できないペアもあった。

カ 外国語

【仮説】 長文読解において、ロイロ・ノートのカード機能を用いて生徒一人一人が正解の限定されない問いに英語で答える活動を導入すれば、全生徒が文章理解に努め、自分の考えを自分の言葉で表現する力が養われるであろう。

【検証】 ○タブレットで一人一人が解答を提出するので、各々が文章を繰り返し読んで内容理解に努め、自分の言葉で解答を考えられていた。また、ロイロ・ノートで解答を送信させることで、よい解答やよくある間違いの共有や、フィードバックが即座に行えていた。

△その場で共有すべき解答を選んだり、正しく自然な英語に直したりしなければならず、内容によっては難しい場合もある。

キ 家庭

【仮説】 グループごとのスライド作りにおいて、Microsoft Teams を利用すれば、協働して作業をしながら多様性を認めることができるであろう。

○Teams を用いることで、スライドを教員、生徒どうしで共有しやすかった。

また、発表後に Microsoft Forms を用いて発表の評価を各生徒に送信させたことで、瞬時に集計結果がまとまり、効果的なフィードバックになっていた。

△今回は各生徒のタブレット画面にスライドを映してプレゼンテーションを行ったが、プロジェクタを用いてスクリーンに投影したほうがよい場合もある。どちらの方法が効果的か、状況に応じて判断していく必要がある。

(3) 評価の観点及び評価基準について

ア 国語

- ・ロイロ・ノートを使ってグループで作成したものを提出させると、記録として残るため、「思考力・判断力・表現力」や「主体的に学習に取り組む態度」を評価しやすくなった。
- ・毎時間評価を付けることは難しい。評価をする場面を精選する必要がある。また、評価をすることが授業の目的にならないように配慮する必要がある。

イ 地歴・公民

- ・グループでただ話し合うだけでなく、話し合いの内容をワークシートに記入させることで、「思考力・判断力・表現力」の評価が可能になった。
- ・各授業内でどの観点を重視するか検討する必要がある。

ウ 数学

- ・授業の展開が評価基準とうまく結びついていた。
- ・何をどの場面で評価するかを慎重に検討する必要がある。

エ 理科

- ・ワークシートを活用することで、個々の学習への取組状況が把握できた。
- ・評価基準がぶれないように、明確でシンプルな基準を設定する必要がある。

オ 保健・体育

- ・ポスターの提出により、感染症予防に関する「知識」の評価や、「思考力・判断力・表現力」の評価が可能だった。

- ・完成したポスターを見ただけでは、ペア両方の意見が反映されているか分からない。活動の観察も必要である。

カ 外国語

- ・生徒が自分で記入した改善すべき点が、次に提出する要約で実際に修正できているかどうかで、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を付けた。生徒の学習の自己調整を促す評価の仕組みになっている一方で、修正しやすい内容を書くと高い評価を得やすいなど、生徒がどのような改善点を挙げたかによって評価が左右されるという問題もある。
- ・一定の英語力が必要となるため、英語が苦手な生徒には「主体的に学習に取り組む態度」でも高い評価がつきにくい。

キ 家庭

- ・発表内容や発表のしかたを評価した。生徒が最も時間をかけ、力を入れたことを評価につなげられた。
- ・教科書等の内容だけでなく、実習で生徒自身が経験したことや、近隣の施設に関する情報などを発表に盛り込んだことを評価できるような基準が必要だった。

2 「探究」の指導計画及び教材の作成

「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れ、3年間の見通しを持った計画を立てるとともに、教材を開発した。

昨年度は、「探究」の目標を本校の実態に応じたものに見直すとともに、1・2年生の各学期の探究課題の設定を行った。

本年度は、1・2年生の各単元の教材を作成し、計画にしたがって探究活動を実施した。本年度の実践をふまえ、次年度以降の1・2年生の計画を一部変更する予定である。また、未定となっていた3年生の探究課題の設定をし、3年間の指導計画を完成させた。3年間を通して、「教科横断的な学び」や「地域と学校の連携・協働」を意識した探究活動を計画している。

(1) 本年度の実践

ア 1年1学期「読書と自己探究」

短時間読書やビブリオバトルを通して読書の果たす役割を学び、自分に向き合ったり他者の考えに触れたりして、読書に関するレポートをまとめた。この経験によって読書の効果を実感し、主体的に読書活動に取り組むことができるようになった生徒もいる。

イ 1年2学期「防災・減災と地域探究」

自分の住む地域の危険箇所や災害対策について学び、自分なりに防災・減災方法を考えたり、それを他者と共有したりして、防災・減災に関するレポートをまとめた。この探究活動の中で考えた防災・減災方法を実行に移すことができた生徒もいる。

ウ 1年3学期「沖縄探究」

修学旅行で訪れる沖縄の文化や歴史、風土等について学び、興味をもって調べた内容を資料にまとめ、それを活用してグループで発表した。また、特に優れた探究活動をした生徒が学年全体の前で発表を行った。

エ 2年1学期「饗庭塩と地域文化探究」

地域の塩田の歴史や塩の伝統的な作り方を、地域の施設を訪問したり、それについて書かれた文献を読んだりして体験・学習し、塩を自分の生活に結びつけてレポートをまとめた。その内容を、実生活に生かすことができた生徒もいる。「家庭基礎」との教科横断的な学びとなっている。

オ 2年2学期「命の探究」

保育園での体験や保健師の講話を通して保育の重要性を学ぶとともに、現代の保育に関する課題について考えレポートをまとめた。この探究活動がきっかけで、保育に対する新たな視点をもつことができた生徒もいる。「家庭基礎」との教科横断的な学びとなっている。

カ 2年3学期「表現力について」

現代社会を取り巻く諸問題について学び、問題の背景や解決方法を、他者ととも考えたり小論文にまとめたりした。それに加えて、自分が関心をもった話題について調べてレポートを作成した生徒もいる。

(2) 次年度の「探究」の3か年計画

	1学期	2学期	3学期
1年	読書と自己探究	防災・減災と地域探究	沖縄探究
2年	命の探究	饗庭塩と地域文化探究	自己表現探究
3年	SDGs 探究		SDGs 探究成果発表
	進路探究		

(3) 本年度からの主な変更点

- ・3年生で新たに「SDGs 探究」を導入する。1、2年次に培った探究活動のノウハウと表現方法を生かして、自分が選んだテーマについて、自分の生活と結び付けながら探究活動を行い、年度末にその成果を各自で作成した資料を用いて発表する予定である。他教科の学習と関連付けて、教科横断的な探究活動が実施できると考えている。また、世界規模の問題を、自分事として捉えて対応・解決方法を考え、地域社会の発展に還元できることも目標としている。
- ・本年度は、2年の1学期に「饗庭塩と地域文化探究」、2学期に「命の探究」を行ったが、次年度は順番を入れ替える予定である。「饗庭塩と地域文化探究」では西尾市塩田体験館饗庭塩の里で塩づくり体験を、「命の探究」では近隣の保育園で園児ふれあい体験を実施するが、いずれの体験も天候・気候の影響を受けやすいものである。本年度、雨のため予定どおり塩づくり体験ができなかった学級があったこと、また園児ふれあい体験の実施時期の気温が低く屋外での活動がしにくかったことをふまえ、実施時期を変更する。
- ・各学年に単元ごとの担当者を設置する。初年度となった本年度は、地域の施設との渉外や教材の作成の業務が一部の教員に集中した。次年度以降、各単元の担当者に業務を分担し、本年度作成した資料や教材を改善しながら、学校全体で運営を行う予定である。

(4) 今後の課題

- ・より効果的な探究活動ができるよう、単元どうしの関係性や繋がりを考慮して、単元の内容や順番を見直していく必要がある。
- ・教員が指定したものについて探究活動を行うのではなく、生徒自身が興味・関心を持ったことについて探究活動を行う機会を、より充実させていく必要がある。

※ 本研究報告書は、令和5年3月13日までに当該地区の主管校に提出する。

※ 名古屋地区においては、緑丘高校、惟信高校、中村高校は昭和高校へ、南陽高校、鳴海高校、名古屋南高校、名古屋工科高校は天白高校へ提出する。